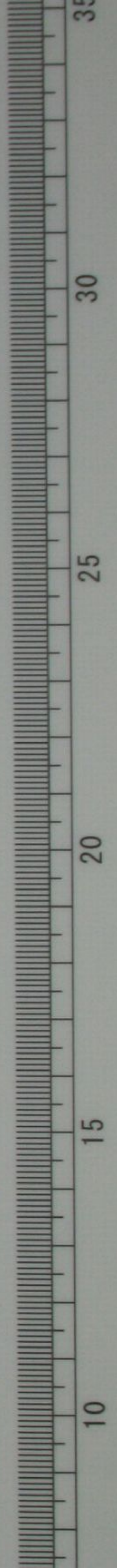


戊寅坐右錄

六

昭和十三年九月五日浣起筆

特別
14
1919
496



戊辰巻右終六

○此頃初りし編入日本美術史の雜誌ハ「三上」を以
 してゐた。誰か書かと思つた。則天武氏の事ハ武氏が愛
 子日昇仙太子の碑を撰出し其の碑「又」の字を
 取つたものとゐた。又一片の標本として巻尾に收められ
 女傑の字を撰入れたの「又」の思ひの事である。
 ○里川真秋と云ふの甘露寺殊に饅頭が好きで漫遊
 や旅行をやるといふのが旅記の著者といふ事である。此
 葉子といふといふ片の事もすなはち其の葉子といふ
 直る葉子といふ事もある。例のこゝろに注文するに下女

趙之謙筆 花卉圖 紙扇



東京 河井荃廬氏藏

尙ほ此日の日誌に、玉木云々であるは、前原一誠の秋の亂に參謀長たる、實弟正誼のことである。正誼は其の舉兵準備のために九州視察旁々、阿兄を説いて我等の味方に引入れむものと、心を固め訪れ來つたのである。さうして翌七日も終日阿兄の許に滞在し、八日朝に漸く出立して居る。其の間正誼が言葉を盡して、阿兄を屈服しようとしたことは論を俟たない。ところが兄少佐は逆に、正々堂々と大義明分を論じ、忠誠大道を諭して、極力其の不心得を誡め、弟の心を繯さうと努めたのであつた。けれ共、生來剛毅一徹の正誼は既に生命を賭して、決心の膽を固めて居るのであつたから、兄が弟に説伏されなかつたと同じやうに、弟も亦兄に説伏されなかつたのである。

そこで兄少佐は、慨然として言葉を結んだ。「不幸にして吾等兄弟目のあたり、今順逆相分れて袂を訣つことは、千秋の恨事實に是れより大なるものはないが、事の茲に至れば最早如何共詮術もあるまい。たゞ此上はせめて武士らしく、潔よく戦死せよ。」と、遂に水盃を酌み交し、やがて弟の立ち去るを、これが最後かとばかりに、暗然たる面もちで見送つたのである。

弟が去り行くと同時に、兄少佐は直ぐに弟によつて知り得た一誠反旗の計畫と内情とを具さに其の筋へ急報した。未だ一誠の兵を擧げない以前に、早くも叛徒の情勢を知り得た其の筋では、一誠が正誼の九州の回旅より歸るを待ち、熊本神風連の暴動、筑前秋月の亂を以て好機到れりとなし、黨を秋の明倫館に集め先づ縣廳を襲ひ來るや、總て叛徒の計畫の裏をかき、出兵策戰悉く機宜に適し、頗る迅速に且つ容易に、忽ち平定の功を收めることが出来たのであつた。是れ全く乃木少佐が大義親を滅するの忠誠に外ならないのである。勿論弟正誼は此の一戦に悲壯なる最期を遂げたのであるが、如何に公私を混同しないといつても、人間としては容易にこれ程迄に正然と、行ひすまじ得べきものでないことは、其の昔小松内大臣重盛が自ら去就に迷つて、彼の強度の神經衰弱に陥つたのに徴しても明かであらう。壯年乃木少佐が、忠道の大義を最も分明に顯現して、千古に其の範を垂れた

尙ほ翌十月二日の大將の日誌に、玉木ヨリ來書、日夕玉木ニ答書スとあつて、之れが弟への最後の手紙であつたやうである。そして其の六日夜、時しも中秋の名月に坐して弟を思ふの情愛禁せず、六首の感詠を認めて居られる。私は序に、それをこゝに挿記しておきたい。

- 時來ぬとまがきにすたく蟲の音も物憐れにぞ聞かれぬるかな
- 泣く蟲は憂きものしもわかたぬを心さむしく聞く人もかな
- 皆人のたのしくや見んもち月もこゝろ淋しくながめられけり
- ものすごき秋のなが夜の夜もすがら夢むすび得ね人を物うき
- 去年の秋たのしくまちしけふの月を我が心より物うくそ見る
- 去年よりも今年の秋は物うけれまたくる年はいやまさるらむ
- 獨り弟の身を悲みつゝ、其の心より物憂くも見る中秋の月であつた。來ん年の秋は更に／＼ものうかるべきを、歌つてをられる。誰

日記から瓜つとき比ぶ、自分始め玉木の何人をも
知つた。乃木は才から秋の憂をあらうしめゆり得れり
に、政府も打措、さう其の備いれよるに、さう人海
さ來る乃木の日誌を握つてゐるが、左の如く記してある
の家名、一幅の張紙山があるが、他の幅と比較し、
思つてゐる、さう、かゝる、今、さう、初、比較、
さう、さう、相対、さう、さう、さう、さう、さう、さう、

張船山行書七律

池田古日氏藏

十年慷慨向關河 風雪蕭蕭岐路多
士慕原陵 怪俠氣人乘燕趙 易悲歌
無事苦被青山笑 如隱真如羅騎
何百丈紅塵吹不盡 垂鞭倚馬渡漳河
伯生不允正司 張曰周書於卷中
答作之齋



尚墨農向余道閩汶水茶不置曰戊寅九月至
留都抵岸即訪閩汶水於批葉後日晴汶水
他出屋其婦乃安汶一老方叙話遽起曰
「杖忘其所」又去余曰「今日豈可宜去」座之
又久汶水退更定矣晚余曰「客方在那裏在
奚者為」余曰「暮汶去久今日不暢飲汶去茶
決不云」汶水長自起嘗種茶旋為炎連加風
雨道至一室明窓淨几荆溪壺或宜宜壺
甌十餘種皆精絕燈下視茶色與汶友政無別
而香氣逼人余叫德余問汶水曰「此茶何處
汶水曰「閩苑茶也」余再啜之曰「莫給余是閩
苑製法而味不似」汶水遂笑曰「客知是何產



余再啜之曰「何其似羅菽甚也」汶水吐舌曰「吾
亦全涇水何水」曰「惠泉」余又曰「莫給余惠
泉走千里水而圭尚不動何也」汶水曰「石復
聽取隱其取惠必開井靜夜候新泉至
旋汲之山石不礙藉瘴底產非瓜則勿行故水
不生磊即尋常惠亦猶強一取地况他如耶」
又吐舌曰「吾一言未畢汶水去少頃持一盞滿
斟余曰「客啜此」余曰「香撲烈味甚渾厚
此春茶耶向渝的是秋採」汶水大笑曰「余年
七十精賞鑑者無及此遂定之矣」

○沈復の「浮生六記」の中に作庭の案法があるが、要略に「大中、小を見、小中大を見、大中、小を見、小中大を見」とある。後の「左の如し」

因亭後、湖廻廊、離心庵を造り、築山を作り、木植を植ふる。といふやうな場合、必ずしも大中、小を見、小中大を見、と必ずしも、文中、意あることゝ思ふ。一より、又、小を見、又、大を見、と交互に見て、或る場合、形を現し、まゝに或る場合、陰に隠す。或る決り、律動的の變化がある。まゝに、庭の地面、大なる石、或は材料が、要する。塙り、及、土、築山を作り、石を石、飾り、配する。花草を以て、垣、木の枝を用い、蔓、木の数を、壁に這、つ、か



くして、山、石、の、ところ、山、が、ある、の、だ。地面、が、空、いて、あ、る。場所、も、生長、の、す、や、い、竹、を、植、え、傍、の、枝、を、茂、く、木、の、樹、を、育、つ、ま、の、竹、を、上、か、り、木、を、や、す、に、す、つ、こ、ん、が、大、中、の、小、を、見、つ、即、象、を、無、つ、つ、方、を、の、こ、ら、ま、い、ま、い、庭、が、庭、の、ゆ、な、る、土、塙、に、凹、状、を、つ、け、傍、り、亭、春、茶、を、這、い、て、保、つ、つ、の、感、一、と、深、の、木、の、あり、し、も、枝、石、を、敷、い、た、あ、ら、う、す、ん、の、岩、を、削、け、し、時、流、る、り、の、野、趣、の、美、も、湛、え、れ、庭、観、の、も、山、肌、を、目、の、あ、ら、い、見、つ、や、う、い、地、が、す、つ、の、か、あ、る、こ、ん、か、小、中、大、を、見、つ、所以、ひ、あ、る、更、に、一、見、行、き、止、ま、つ、つ、物、に、る、と、小、庭、か、く、急、な、庭、の、ゆ、な、く、出、ら、ん、と、や、う、な、庭、の、庭、を、用、く、と、志、め、ら、

の筆劃と連系の範とするのも不忠儀の事い、林檎の
説く所を攝するも、たの如くはあり

書道の影燈の、今も信じらるゝことのため、
つが連系は、及びしてあるのむある。この影燈
の柱は、かゝる屋根だといふ、真直ぐな力のま
線と、山の大隈を骨柱持を、用ひるところに
見え、殊に屋根の端交りをつけること、直歩た
寺院住宅の形式、釣合ひ、優雅とのあやうな一般
的の感の、やゝ著しく見えぬ。

骨柱構造を、見え隠れして、然らば、ちやうど、
つが、筆劃の、河巻と、似てゐる。恰むの、輪廓の
後が、筆劃の、あの形を示すの、用いゝん、つが、む、け、



まゝ自身の大隈を自由を持つてゐる、この、枝、連系
の、まゝに、枝、まゝに、行や、屋根の、種、梁、まゝに、
かゝる、全、お、見え、まゝに、つが、む、け、
に、の、まゝに、まゝに、を、飾り、し、連系、全体、の、構成、の
まゝを、其、つ、つ、點、心、を、委、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、
那、の、正、物、の、骨、柱、全体、が、恰、ま、何、か、の、意味、ある、け、ん
ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、
こと、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、
を、ぬ、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、
示す、律、動、的、な、輪、廓、を、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、
細、ゆ、か、く、家、の、内、部、の、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、
材、木、と、壁、の、河、川、の、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、

年々外史の刪定ニ甚心し、酒を解して劍菱大ぬ
物の酒豪と云ふべから、彼んか物類と兼味する時ハ
酒氣沸くとして、伏上は張つれ、こが想像を、難くする、あ
の大著も、突ハ、越劍及び人を動す、文章の効、校七、板假の
氣合七、酒をもきて、岳つと、まの、か、定、陰、ひ、あ、こ、も。幕府の老
志士の活躍、酒樓を兼、酒地、こ、彼等、日、別杯を、汲、ん、だ、之
又、期々を、圓、う、難、い、危、険、の、地、を、踏、み、僅、か、れ、酒、を、以、つ、て、●、緊、張
を、解、き、鬱、悶、を、や、つ、た。作、の、革命、運、動、七、只、一、面、面、を、見、こ、す
頃、酒、香、街、に、も、運、動、の、あ、る。人、の、ま、く、血、を、ま、く、こ、の、運、動
と、云、ふ、一、面、酒、具、の、運、動、の、思、ひ、の、故、に、う、む、む、あ、る。
人或ハ酒を、娯、楽、の、具、と、す。甚、一、き、ハ、此、酒、の、具、と、す、也、と、
云、ハ、一、も、知、る、こ、と、を、知、ら、ぬ、酒、を、是、命、と、す、ハ、酒、の、い、つ、七、西、義、り



味方である。日本の酒を、重んずる。と、他邦へ、越、え、百、般、の、儀、式
酒、を、く、し、て、行、い、ん、る、の、所、以、ち、此、故、也、ある。古、來、日、本、に、於、て、酒、徳
を、極、力、を、押、し、し、よ、の、快、楽、は、大、に、盛、り、あ、る、彼、の、一、氣、を、中、二、
と、し、た。彼、の、一、勝、を、得、る、お、れ、一、氣、を、か、く、遂、に、千、歌、の、馬、印
を、押、し、ま、す、と、向、あ、所、敵、と、す。●、形、勢、の、あ、る、を、七、疎、濶、し、た、
是、の、如、く、酒、を、飲、む、よ、う、と、す、又、彼、を、酒、を、宜、揚、れ、よ、う、と、す
ハ、中、陣、と、酒、の、関、係、ハ、千、歌、の、馬、印、ト、兼、録、本、傳、ト、
を、想、ひ、起、す、常、説、を、あ、ら、ぬ。●、酒、の、東、湖、ハ、新、い、う、の、歌、の
東、台、の、千、歌、を、採、り、し、た。●、北、歌、ハ、志、士、の、歌、也、
作、の、大、著、ハ、後、集、●、カ、あ、つ、た、こ、と、七、忘、ん、と、い、う、の、華、
命、の、表、●、鮮、血、ハ、あ、ら、ぬ、其、裏、ハ、酒、ハ、あ、つ、た、美、か、原、
新、カ、ハ、あ、つ、た、こ、と、も、思、ひ、ぬ、は、ら、ぬ、と、い、ふ、や、し、こ、し

美しうして世界無量を喰ひ止むれのを多とせ給へうしぬ
此書に附する諸書の切りぬきと春紀七巻

○元田筆七八十一巻に遊と跋し元田の書著るう大又その
二年先坐筆して亦直士として一時腕を振ひ正山松堂と
ぬ敷事かあつた。元田が内田泰河深を正山寺録所と云
れどもあつた。元田の早く政多分りて授け録袖元天の
か説勸をいを粗りま。紀元院より十卷正山潤生流を
送つれりの何説かあつた。元田の大寺時代は石室
と邪しく漢江を河に後、西東と邪と改めれ。
○書畫を冬印して二日間花情を然捨す
中、除外するべきもの若干あり、多くは家むと属し然
らざるものも五家之條あり、そのを價し、家、何



るを可とすしあを考き授けはたなり

- 泰山摩崖、無量壽圖、拓本一巻
- 大魏天平二年佛像刻銘、拓本一巻
- 徐三唐の篆字、聯牘
- 唐人草書、小紙二幅
- 大江丸、鴛鴦、俳句
- 如洋、古書、陽州、飲圖、後田巻
- 山中、克、歌、倫、和歌
- 山内、定、巻、書、簡、秋、月、種、相、宛、印、二、類、添
- 小中、村、清、短、詠、迎、鳳、歌、文
- 福地、極、痴、狂、語、誦、書、簡
- 三才、人、造、墨

- 一 前島寂遠都建白自業稿 撰卷
- 一 秋三村雄黄三浦嶋村文行
- 一 狂病松浦武四郎宛書前 一幅
- 一 龜田晴斎戲詠一卷
- 一 同 六字名號一卷
- 一 紅葉山人書前 余宛
- 一 寺崎彦業終入書前 余宛
- 一 震災紀念書畫帖
- 一 秋月種村提言仲氏易序 撰卷
- 一 依久間翁山曰上序跋 同上
- 一 前原一誠一行書 何時余の为り
書下
- 一 垣内道遠三友分飲圖



- 一 大江蓮高書晴翁酒經
- 一 大江彦海書帖
- 一 市川進庵小照詩帖
- 一 登田愚所小照詩帖
- 一 石川侃翁小照山水帖
- 一 成海為書中二席全文堂帖
- 一 正城老人畫幅二
- 一 菰野墨妙 帖
- 一 何内直造書畫 小帖
- 一 同上キマキ人集 自叙自字
才瑞本
- 一 句佛觀音
- 一 句佛自繪畫幅

和泉園遺墨 一卷

和泉園久澄和歌 一幅

和田菊吉画狂言瓜盗人

肥田曾竹嶋诗幅

家廟遺影 四幅

家廟遺墨

朴泳寿诗幅

高芙蓉模印影 二幅

香草高七律 二幅 黄草田

二雁齋平书简

苗溪松本一卷

徐三庚篆字联幅 重五



一休禪河 雄の道進行

先子通德院新画一幅

正坪蟹の细幅

春永泰山和诗款画

杏伴二字款

二为雨村存款

根高篆字款

師友書簡数卷

同 大凡の公 张込二帖

愧存文書

小室権書幅

名刺後云幅

頼る可物とす、研俊一簡利ふ、披見まへば、歌人杉浦翠
子の者前より、予去年此の人とて歌集を贈らん、批評
いみじく返簡と披し、未時々音行あり、然人も余
此の如人の画家杉浦非みのあつたこととあつたのみ、其化
をかうか、同らうき、此の福澤枕の實妹らうんとりも
簡とれと、空て其の二一冊あり、見と俾らり、歌集をよき、未
二兄の神全案を誦誦するの一文を描く、余枕外と披見、
福澤系、斯の實利主義の人あるの故、其も是れ、
枕外も或る意味、又於て此の世の扶男史、
余自ら其印の附せんとも、數十画物の内一物を抽き之
んと壁に掲ぐらん、長尾海田の雪根秋のの意、う余氏
人の画をまじふ、其の意、其の意、後人、一歌と書かん、云く



鄰樓大張宣、瓜足雪兒歌、其の是千金子、何と
狂態多、自天尺我亦同歎、辛苦紙毫、よの道
雜誌二三刊達中、余の空の行とぬらうともあつ、一
後校正の乱暴、當らう、各材料と拂い、雑誌の
校正のあし、其の常例、二、三、四、五、六、七、八、九、十、
ト悪化す、罪輕か、其の相、南の校正、力を置く
能は、その社の非運、と思ふ、一、概、怒、る、こと、も、う、か、
注、き、復、ふ、あ、る、き、也、一、雜誌、又、版、畫、道、と、論、し、版、畫
の本、録、と、説、く、曰、感、也、云、々

肉筆への一切の河被を断り切つ、此境、唯、其、互
肉筆的、多、ま、く、存在、を、許、容、し、る、行、程、と
此、依、る、初、め、版、畫、固、有、の、録、域、と、版、畫、の、公、録、と

が基礎つけん、早くて又改性質又主脚七改性質を
はのて改畫の本意が聞けて来るのひある

考ふるゆへも改畫は再畫畫に極むべきとのひある
再畫といふと別るよる主脚(今と別個の方向から
去る)と畫するのて行く道ひあることを知らるる

ろく

改畫の改世俗が本行らるも慢んてゐる所以の刻工制工の
技術が心ある及のひの技巧をかくるからひあつて、改畫の
よの原心への改畫するよのひあるといふ名言がある。

夜よりうらぶの聲が終つて物望酒を温めて飲む、雨の已に
宵の星出の北窓の力の考ひも、宇然思ひ出れり、
元行城のりこしとある、長を思ふとも古の洞室中の人間の探



り得るの秘窓の境があつた。行い難い理を走るのを空中横割
とさくあつた。仙人まゝ、超人間の力を有つてゐるよのまゝ
●馳けるよのまゝ久米の仙人をいふ界()とのまゝ女の足肌
を看して足をまゝく()と蒸らねとまゝまゝまゝまゝ
ひらく、架空の流とくが()と下まゝまゝまゝまゝまゝ
七の理、余蟲かゝぬ人間の空中をいの由もまゝまゝまゝの
今の横横まゝまゝと馳駆し、馬の及のひのまゝまゝまゝまゝ
目揚す。今まゝまゝまゝまゝと見るとまゝまゝまゝまゝまゝ
に法がまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝ
まゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝ
凡とまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝ
本はの横横まゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝ
のまゝまゝ

（江ノ川の探検も一頁に過ぎず）と得た。一台の旅行機
を私有して優遊全國の景を勝手に入賞せしむとい
ふ余の理想のあり所以也。最早ハ秩ノ無人ノ
ノ死別が近所の死地に入らば、切れし其
前ニ中ノ人ト云つて見たい。佛法を修らば
八里と離れ山に寺を至人必死か、何れに一字を道
めを空よりと修法の安とせしむ。

○お八の巻 ● 藤田五湖の詩如きを根本に就て見ふ折
本の巻尾に五湖の二詩とありて、
旭社念六語 空の松の文を今白居の
詩句賦湖亭秋夕得波字



此世量年共可歌 湖亭況復勝遊多 行脚
四坐群英列 秋滿扇橋萬象混 望野
添吟咏 柳雪 小松 秋色 照 醉 飲 醜 微 風 斜
日憑欄處 山自蒼 水自波

○白居の家老の志意をたゞて是つたか今も最後の
空笑前ニ遊 五湖の詩をたゞて是つたか今も最後の
書函全集ニ五湖の詩をたゞて是つたか今も最後の
印の死前ニ古文古法等を係して是つたか今も最後の
つたか今も最後の古文古法等を係して是つたか今も最後の
去印の先は家老の志意をたゞて是つたか今も最後の
つて七八十幅ある。いん重々家老に属するよみ白居

小品書畫

- 越嶺山中 山水卷
- 十齋宿寤卷 柳外詩卷下
- 画冊 天竺方士畫等十餘家
- 山中靜逸画卷二
- 狩野夏雁画帖
- 未定年寸珍帖
- 小去來初歌帖
- 泥舟初歌帖
- 長屋後田画冊
- 吟香初歌圖
- 富山寸珍畫冊

海田錢生 橫卷

- 柳外詩卷
- 柳外書画寸帖
- 雨谷畫帖
- 錦長印林 系本
- 曰
- 三餘為手今乃心卷
- 野跡古今集 可也 二卷
- 定悅手寫法書 一作橫
- 法名家自題印冊二
- 法華經豆本 八卷
- 曰 橫卷 一本



雪嶺春卷

- 道過也畫冊
- 同去平人集
- 明流名家画帖

法經 未摺一冊

- 韻書 二冊
- 胎內徑 細小本
- 印刷標本 最細小本 三種

縮迹帖 山崎神祇三海等

- 扇面帖 星石聖老秀歌 佳月 港如等
- 流娛帖 行州 素真 碎花等 五年
- 柳塘羅漢回卷 一 鷄血石歌分詞 印漢一
- 新式雜念詞 一 海月詩后印 小帖
- 通布画帖 二 一 鉄茶湯戲 在
- 魚尾画冊 始神等
- 佛說摩訶酒佛如樂經 在 卷
- 蘭溪粉本 一卷

既其本 源氏物語

- 源氏物語 大小二種
- 今大袖套 卷 二冊
- 袖中月雅 家女人字寫
- 世界戰争時の獨己的物
- 一 沙翁全集 十卷 夏書
- 一 度直互海道五十三次圖

小品書畫

- 越前山中 山家卷
- 雪露宿家卷 柳外三溪香月不
- 画冊 天竺方直等年終家
- 山中靜逸画卷二
- 狩野夏雄画帖
- 未定年寸珍帖
- 小去乘初歌帖
- 泥舟初歌帖
- 長座後田画冊
- 吟香初溪園
- 富山寸珍画冊

海田錢書 横卷

- 柳外詩書
- 柳外書画寸帖
- 兩谷畫帖
- 錦景印林 系本
- 曰
- 三餘寫字今心卷
- 野跡古今集 高田 二卷
- 定規字字法書 一帖 横
- 法名家白卷印冊二
- 法書字法豆本 八卷
- 曰 横卷 一本



雪出春卷

- 遠近也画冊
- 同々々々々集
- 明流名家画帖

去任 未摺一冊

- 韻書 二冊
- 胎内徑 細小本
- 印刷標本 最小本 三種

一編通帖 山家神記三海等

- 扇面帖 望石 聖毛 秀歌
- 清娛帖 行州 素真 研範等
- 柳塘羅漢回卷 一 鷄血石歌分詞
- 新式舞合詞 一 海内詩房古印
- 通書画帖 二 一 鉄筆游戯 在
- 魚題画冊 休元等
- 佛說摩訶酒佛外樂經 在
- 蘭溪物本一卷

政具本治氏物詮

- 深氏カ儿夕 大小二種
- 今才神集 系本 二冊
- 袖中月箱 家大人千字
- 世界戰争時の獨己紙抄
- 一 沙翁全集 十帖 系書
- 一 度重文海道五十三次画
- 一 哥麻屋美人画帖 横
- 一 人體骨名カ儿夕 系評附
- 一 テイゴニ、コトテ

金石門

汪敬淑方信

古吳其若模印信二

徐三原 篆字聯幅二

朱德義士印信

水竹印信

陶台一行幅 二

汪敬叔印信

由去未印信 附林谷詩

谷田過所持幅

山陽蘇氏印信

希子印信幅

德士印信一卷

槐石印信字款

日山大近山之幅

泰山磨崖無量壽圓拓本

大魏元平十二年佛傳刻銘

烈公碑銘拓本

春日塔拓本 事四年 本堂長存

良寬拓本 數枚

古柏園瓦廿卷寺書換取本

羅張玉篆字聯幅二

聖教序一面碑

菱湖書刻太上感應經

版本

口及故中もたりる行出のし
今余の地中、志外
の、向、叔の、向、と、思、く、も、今、捨、す、も、懶、し、こ、も、奴
め、互、き、他、の、捨、す、ん、と、す、



○吾當麻寺中将姫の事次支那に傳り版刻し
るものあり。其の翻刻稀に本邦に坊間に在り。
○日本日偶に獲たり。序文に徵するに文化六年

冬月尾日張興正寺僧實祐の翻刻するものあり
目六枚あり。而顔略多支那人の風格を有する七一
思つる。卷首に云

日本大和州當麻寺化人既造藕絲西方境界
起説

黄檗四代性瑩獨湛(集)
東の嗣法門人道善平悅峰録

とあり。えん、依んハ獨湛の撰ひたり。又彼土に刻せ
るものことあるべし。古経を花記あり。徹定の
書卷と名くたり。十月廿五日記

ちのくどのこと良山を茶花の抄録と記帳す

○蛸蛸 ^{あめつた} とまふぬらん ^{ちんぎん} 此陸を一種不思議の靈珠を
有すとひしりすんき歎、その体は具りる説くこと如
何より不思議な此等の安んを合するもの、常を
其をを足しあり。蛇を此の心持に攻所の人
はらまらんやん後とあり。此頭のをに附着すると
能くする身動きせらるるぬかえらるる、能く能く

風景の選擇は現地のありかた、其人の志業と此の地との
歴史と受揚の記号を鉄いこのうらぬ。

○市の方出政の百種文庫中、森林鏡三の編入係りおら
たの「月」と題する中、おん地獄化の我邦の地科を
考へて係り五十二出て、ある由四十家の大作家つてある人物
が、此方：他を初めをわりのよみか、**見家**あり

麻田劉主

得るが西洋曆をも修め、我邦の
曆より幾人由りも連し

間長涯

徳尾の主人は地球儀を作り、度量術
を納書す

阪本天山

我邦砲術界の筆名、天山流砲術の
祖、佐伯の人、砲架をもしぬす

中野柳圃

獨力七星を造り、唱い、海軍新造の著
者、得逸文をもしぬす

土生玄碩

眼科医術の師、文豪大石良雄の弟
孫、幕府に用ひらる、**シロハルト**事
件に坐す

回文一貫齋

幕府所用の鉄砲飯沼の空気が銃
を造り、**シロハルト**鏡を造る、木場の実
とを統制した人

馬場教里

通河から幕府へ伝ふ、**外田漢入天**
才ありて、何れも通河也

鈴木春山

西洋兵を我國へ引入る人、兵を
水瀬の若かある、**雲居の口人**也

三浦研次

シロハルトの子弟、長英と慕ひ
稱せしむ

○院本に評の市と云ふ盲人が、
上と云ふ隆茂の市と云ふ盲人が、
てあひか、評の市と云ふ盲人の實在の人、
失ゆか、白内障のあつたとき、
評の次、慶の念へたこと、
日本科の書、
澤部と云ふところ、
又著名の眼科醫が、
んの土生元碩、
高の家、
つて、
却か、



名高の眼科醫と云ふ、
レ、
いから、
つ、
せん、
の社、
の潤色、
本城、
つ、
か、
あ、
ま、

十一月朔
(オムン法)



乃木將軍聯隊旗事件

尾佐竹 猛

乃木將軍の殉死の主なる原因は、明治十年西南の役に聯隊旗を奪はれた事件であることは、今では誰知らぬものなき著名のことであるが、當時は秘密に付せられて居り、奪はれた聯隊旗は、野津大佐(後の通)が直ちに奪還した事となつて戦記に華しく書かれ、勇ましき錦給も數種傳はつて居る。

その真相が世に發表せられたのは、明治四十年西南記傳編纂のときであり、二三の新聞紙に掲げられたのであるが、その頃

五月八日 聯隊旗遺失ノ事
第十四聯隊長 義三 植木 向ノ
植木 義三 於テ賊ト數回劇戰シ

はさして反響はなかつたのである。そこで、猶詳細の記事が西南記傳に載せられてあり、奪はれた聯隊旗は戦後、警察権により村田三介の遺族の手より取還されたことも明白となつたのである。

然らば、當時の乃木將軍の責任はどうかといへば、

乃木將軍が自ら責任を感じて罪を待たしたのであるが、今の法律語でいへば緊急状態として無罪となつたのである。

これに責任問題は一應解決がついたのであるが、肝腎の聯隊旗が無くては上氣に關するから、參軍(軍司)陸軍中將山縣有朋より新に下賜ありたき旨を稟申した。

旗手某之ニ死シ遂ニ其隊旗ヲ失ヘリ夫レ該隊ハ引續キ奮闘力戰他隊ニ挺テ屢功ヲ奏セリ然ルニ軍旗ノ有無ハ大ニ全隊ノ士氣ニ關ス故ニ新ニ軍旗一旒ノ下賜アラムコトヲ希望ス云々

といふので、如何に乃木將軍が其責任を痛感し決死奮戦したかは、この短き文面に躍如として居る。

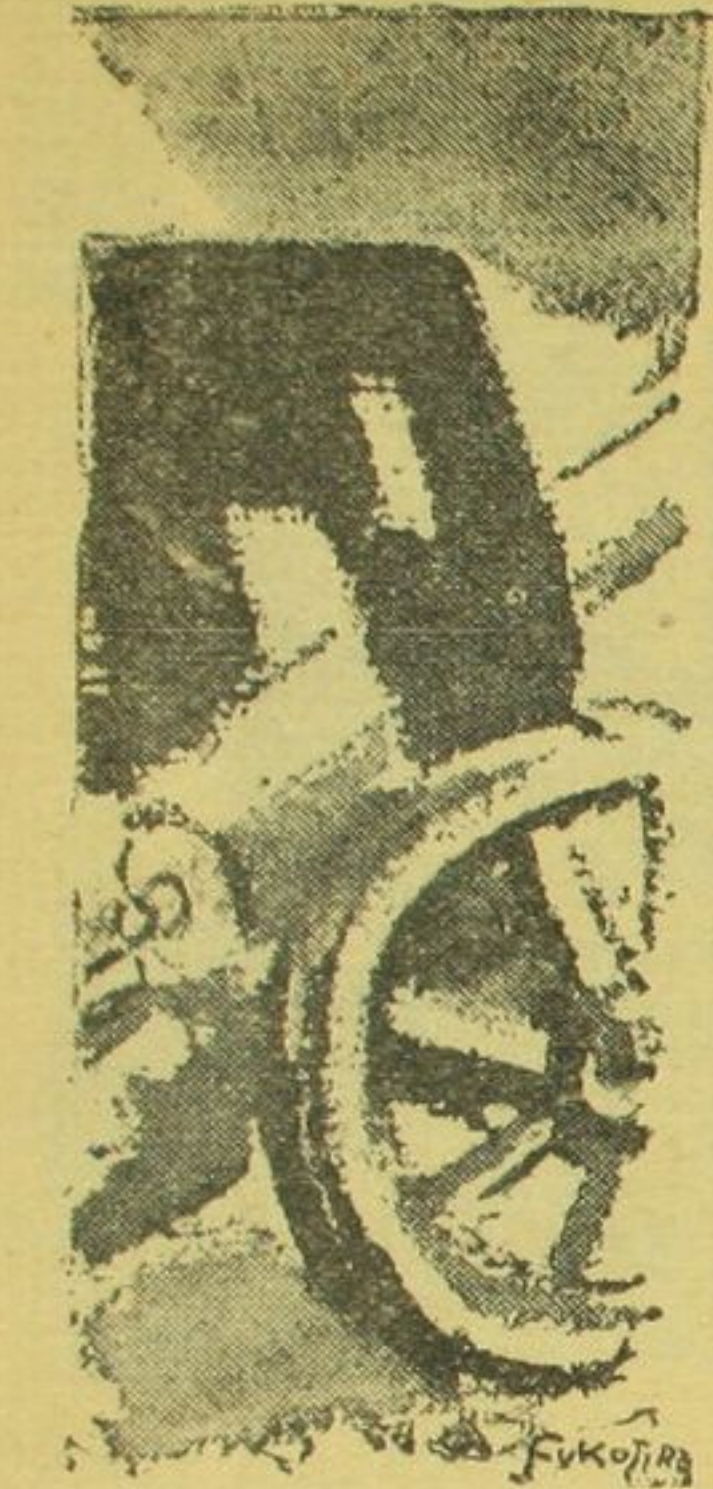
司令長官陸軍少將谷干城ヨリ
征討參軍陸軍中將山縣有朋へ
何田朱書之通指令相成候

何書及ヒ指 然ルニ同隊ニ於テハ
最初ヨリ引續キ奮闘風々其功
ヲ奏シ候ハ 顯然ニ 候 處軍
旗無之候テハ 此際同隊之
士氣ニ關涉 候ニ付至重之軍
旗紛失 候ハ 奉シ恐入ニ 候得
共旗手戰死急迫之場合萬不
得ノ已ニ付特別ヲ以更ニ軍旗
一旒征討總督へ御授與之上同
聯隊長へ授與相成 候 様致度
此段相 候也

明治十年七月三十一日
陸軍中將島尾小彌太

と太政官に上訴した。
これに添へた、陸軍省の省議

本邦軍旗授與式ハ略々佛蘭西
式ヲ折衷御採用相成タル儀ニ
テ同國ニ於テハ一次授與式ヲ
以テ相授ケタル上ハ永久之ヲ
用フル由故ニ若シ過テ敵ニ奪
ハル、時ハ其後敵旗ヲ奪取ル
迄ハ授與セサル由此例ニ非ス傳



承ス尤モ是ハ彼國ノ制度ニテ
聯隊ヲ一度編制シタル上ハ永
續セシムルコト 猶此邦寺院ノ
如ク人ハ代レトモ其隊ハ永續
ノ姿タルヲ以テ右等ノ法制モ
有之儀ニテ一ハ其隊ノ面目ヲ
汚スコトナレハ 後來ヲ顧マス
ノ方便ニモ可有之然ルニ本
邦ノ御制度ハ未タ此等ノ事迄
御定無之且又今同之戰爭ハ
外國ト交戦ノ儀ニモ無之敵
國へ奪ハレタル儀ニモ非ス旗
手戰死不得ノ已儀ニテ何レモ
内國ニ係リ且又聯隊編制モ略
々彼ノ兵制ニ法ルトハ 申
草創ノ際前條ノ法式ニ拘リ耳
目ヲ明ニスルノ實益ヲ失フ
ニ至ルハ軍機ノ主旨ニモ無
之ニ付後年一定ノ御制度相立
ラル、迄ハ何之通征討總督
へ軍旗一旒御下附然ルヘキ儀
ト省議致シ 候事。

といふのである。そこで、
陸軍省
歩兵第十四聯隊本年二月植木
義三於テ賊戰ノ際旗手戰死フ
途ケ軍旗紛失ノ處爾來益々奮
闘各地ニ轉戰能ク其功ヲ奏ス
因テ更ニ軍旗授與 候 條總督
本營へ護送方可ニ取計ニ此旨相
達 候事
明治十年九月十五日
太政大臣三條實美

加治川保勝會區城圖

縮尺五萬分一





人 商 行



屋 鏡 眼

口土井の... 近年の... 現象... 人...
 が... 今... 拭... 得... 人... 身...
 大... 載... 械... 左... 定...
 来... 林... 初...

土井晩翠

謹啓

故遠先生の親友たる尊甚と相得の
榮を待たず年果望れ所り作ら
亦が親しく高教の極まるを得ませし

亦よりの同の「秋のたより」の文章と相得
全く同感いたし、信利の先日帯
手の好信懐毎の記をりやこそよま

此の先にお友と云ふは、
私の友と云ふも、た、何年右の御察下さい。

未定あり、國難時代、
豊田同(新幹役)たる考子(こころ)は、
あまの心、

同相の英魂を思ひます、
このガトシグリーばかり、
あまの心、

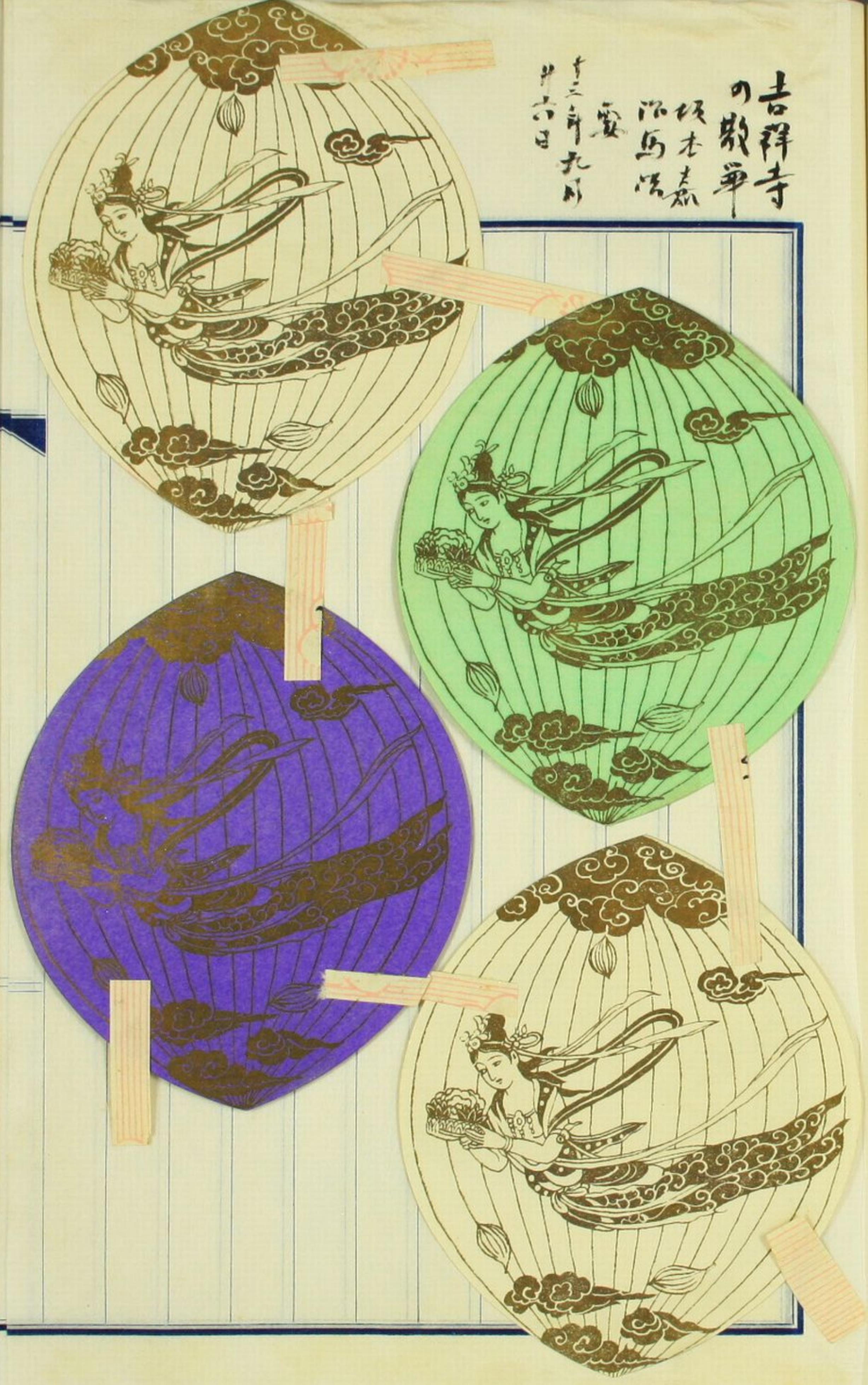
春城先生 御下

十月五日

信利
氏

昭和十三年十月二日
信濃の紅葉愛
信濃の紅葉愛
信濃の紅葉愛

土井晩翠氏本社へ詩を
信濃の紅葉愛
心で胸を刺す
紅葉が防れる兵に北の都府
終焉を感りはせ心か
憂慮に堪ない
が、春城に
在批判であるが併し
又此の言葉は我々
て是非とも味はな
と思ふ六十八とは
はまた青年のつも
大い懐のこを喚
が人もあるが、
は懐に酔つて
るぞ……
と胸の名字の使
連累の詩人である
日朝出前の一
上の二戦つた有名
詩人である、
私には、
一篇を
は晩翠氏



吉祥寺
の
散華
の
夜
木
松
澄
露
廿
三
年
九
月
廿
六
日

明治廿三年十月五日 午三時 開場儀

英國法學博士
日本文學博士
木松澄露

谷間の姫百合

役名番

Composition from the Drama of Mrs. K. Kuroki, translated by G. T. ...
and Mrs. K. Kuroki, Dramatized by G. T. ...

物出最 一喜劇 二喜劇 三喜劇
喜劇 一喜劇 二喜劇 三喜劇
一喜劇 二喜劇 三喜劇

(り 上 帖 家 展)

と呼べる様になつた。こ
 れからのことは誰もが知
 が、書物を講義しながら
 話をした人は甲府佐渡町
 に立つものは珍らかつた
 輕節屋の主人であつたが、
 三四年前に死亡したので其
 ので、其時偶々通りかつ
 た名古屋藩の家老は馬上か
 行先をさきく事も出来ない
 は惜しい事でもある。

會て畫家の池大雅、書家
 の韓天壽と俱に富士登山を
 企て、奇行をばらまきなが
 ら京都から名古屋を過ぎ木
 會路を経て甲斐に入り、富
 士の北口即ち今の吉田口か
 ら登山した。其後三岳通者
 といふ雅號を用ひたのは有
 名な話である。

名古屋では面白い話があ
 る。普通の道中では面白く
 ないといふので、大雅が町
 甲府を過ぎて（この時は
 何處へも立寄らなかつたや
 うだ。）勝沼を通つた時は秋
 の真中で、名物の葡萄の成
 熟した頃であつた。三人共
 昔から祭文や浪花節をやり
 また三味線など引いて門づ
 り

う名主の宅まで呼付けられ
 たが、皆風流人である處か
 ら深く其罪を責められな
 かつたさうだ。其時書いて名
 主に示した三人の合作のも
 のが四十餘年前まで保存さ
 れてゐた。其用紙は樹入を
 横にしたもので、大雅が葡
 萄を寫した上に二人が贊を
 したもので裏に『のじ上』と
 あつた。これが轉々して後
 東山梨郡日川村一丁田中
 三井沈齋といふ醫者がしば
 らく所藏して居つたが、明
 治二十四五年頃名はるま
 へに東京の人に三十六回で



フエノロサと三井寺

衣笠 梅二郎

之能机月新
 可裁

飛諾洛薩先生 諱越爾涅私篤
 佛蘭西斯格一 千八百五十三
 年二月十八日 生于米國沙列
 謨市其先出于 西班牙米國人
 先生學于哈廣 士大學專修哲
 學以英才顯明 治十一年爲我
 東京大學所聘 來講哲學論理
 明晰鑿鑿中窾 居數年旁考究
 日本美術大有 所得明治二十
 三年期滿歸國 朝廷乃叙助三
 等後再三來遊 然不久留而去
 自是于講演于 著述唱道日本
 美術之精妙而 不已將著書以
 有所大主張而 暴致于倫敦客
 舍時一千九百 八年九月二十
 一日也先生會 學佛教于櫻井
 敬德阿閣梨深 信之遂受戒號

日諦信故知友 門人相謀改葬
 于園城寺法明 院蓋因于其遺
 志也
 明治四十二年 九月二十一日

上掲の引用文は園城寺即ち、三井寺の律院、法明院に於ける Er-
 nest Francisco Fenollosa (1853-1908) の墓碑の碑文の全文であ
 る。墓碑は花崗岩の五輪塔であつて、最下部の方形の臺石の四面に
 上掲の碑文が、一行六字詰にて彫刻されて居る。文は門弟、井上哲
 次郎博士の撰になり、書は日吉神社宮司、伊藤紀氏の筆である。建
 碑等に關しては有賀長雄博士が終始事務を管掌せられ、此れが經費
 は東京帝國大學、東京美術學校其の他關係有志の寄附になる。近江
 八景の一つとしての三井寺に參詣して、旁々、辨慶の釣鐘或は汁鍋
 を拜觀する者は多いが、法明院に足を運ぶ者は餘りにも少い。園城
 寺の塔頭の中最北部に位置する法明院へ赴くには、京阪電車、大津
 阪本間の山上停留所下車、道を西方即ち、山手に取れば行く事數町
 にして門前に達する。現在、陸軍病院として使用されて居る、歩兵
 第九聯隊第三大隊の舊兵舎の裏山を小路傳ひに大津方面より來れ

重三の、

ば、同院に案内を乞はずして直接にフェノロサの墓の所在する墓地に至る。附近には新羅三郎の墓があり、弘文天皇の御陵へも比較的に近い。三井寺の展望臺附近に設けられた總本山三井寺巡拜案内の立看板にも、彼の墓碑の所在地を求める事が出来る。

“I want to go back to Midhera!” とは、フェノロサが不幸にもロンドン客舎に於いて頓かに病歿するに際して、此の世に於いて最後に述べた事柄の一つである。彼の死に臨んでの此の希望は幸ひにも叶へられ、彼の二度目の夫人であり、彼の遺著 “Epochs of Chinese and Japanese Art” の編纂者たる Mary McNeil Fenollosa が遙々、亡き夫の死灰を携へて我が國に來り、近江富士に對して琵琶湖を俯瞰する。風光明媚の此の地に葬つたのである。清水港を見下す東海の絶勝の地に位する彼の觀富山、龍華寺に於ける高山樗牛及び齋藤野の人の墓の如く、靈峰富士に向つてはゐないが墓地は幽邃限り無き山腹の松林の中に在る。眼下に展開する湖岸には、柳ヶ崎水泳場に琵琶湖ホテルの巨大な和風の建物が巍然として立ち、唐崎の此方には蒲鉾形の大きな銀灰色の飛行機格納庫が横たはつて居る。湖上にては水上飛行機が頻りに離着水の練習を試み、純白の汽船は沖合を悠々と進んで居る。南方の栗津、石山方面は湖岸に迫る翠巒に隠れ、北方遙か彼方の堅田は水天彷彿として居る。上掲の碑文に依つても分明する如く、フェノロサはアメリカ合衆國、マサチューセッツ州の工業都市 Salem に生れた。父はスペインより渡來した音楽家であつて、セーレムに居を下して音楽の教授をしてゐたが、土地の名門の女にて音楽の弟子の Mary Silbee を娶つて其の間に生れたのが彼である。彼はセーレムに初等教育を受

け、次いで Harvard University に進んだ。一八七八年（明治十一年）東京大學の招聘に應じて我が國に來朝して理財學及び哲學の講座を擔當し、引き続き一八八六年迄、同大學教授として論理學、美學等の講義をも試みた。豫て繪畫に一隻眼を有する彼は當時早くも我が國美術の眞價を認めて、卒先して其の研究に従ひ、一八八一年には狩野芳崖等と共に觀畫會を起して、我が國美術の復興に大いに力を盡した。大學の教授の職を辭して後は、美術取調委員に任命せられ、同時に帝室博物館顧問、美術學校顧問及び教授をも兼ね、其の間、岡倉天心等と共に美術調査の爲に海外に派遣せられた事もある。彼は東京美術學校の開設に與つて力があり、同校の教務に携る傍ら國寶の調査をも委囑されて、我が國美術界に盡した功績は著しきものがある。

一八九〇年（明治二十三年）彼はアメリカ合衆國に歸國して、新たに創設された Boston Museum of Fine Arts の東洋美術部長として、其の基礎を固め充實を計り、東洋美術を廣く合衆國に紹介した。一八九六年、ヨーロッパを経て再び我が國を訪れたが、暫時、京都に滞在したのみにて、其の年に一旦合衆國に歸つた。翌年、又來朝して東京に居を定め、各所の學校に聘せられて講演を試み、各地に名所舊跡を探り、美術のみならず、佛教、能樂、國文學等をも研究して、特に佛教には深く歸依する處があつた。一八八五年（明治十八年）彼は合衆國の富豪にて我が國美術品、就中、蒔繪の蒐集家として有名な William Sturgis Bigelow と共に、岡倉天心の媒介に依つて法明院の櫻井敬徳阿闍梨を知り、同阿闍梨より授戒を受けて諦信と號した。ビゲロウの法號は月心と稱する。フェノロサは彼の美術蒐集

品の殆んど全部をボストン博物館に二十八萬圓にて譲渡し、最初の夫人と離別の際に其の大部分を慰籍料として割愛したと傳へられて居るが、同博物館所蔵の數多の詩繪の中、大多數はビゲロウの蒐集になると云はれて居る。

フェノロサとビゲロウの二人は敬徳阿闍梨を少なからず尊信して、後者は施主となつて東京小石川の白山御殿町に大伽藍を建立し、同阿闍梨を勸請する事になり、前者は美術調査の海外遊歴を利用して、彼地の寺院の建築様式を参考の爲に視察する筈になつてゐた。然るに老父危篤の報に接してビゲロウが急遽合衆國に歸る事となり、阿闍梨も其の後間もなく入寂した爲に、此の計畫は遂に實現されるに至らなかつたと云ふ話がある。一八九六年(明治二十九年)再び來朝の節、フェノロサは春より秋に亘つて京都の下鴨に假寓して、屢々、敬徳阿闍梨没後の法明院に直林敬園師を訪れて教へを乞ふた。其の際同行の彼の夫人も同師より授戒を受けたが、此の時既に彼は靜寂なる此の地を己が永遠の眠りの地として選定してゐたのである。一九〇〇年、彼は再度合衆國に歸り、爾來、八年の間合衆國諸州を巡歴し、或はイギリスに渡つて講演を試みてゐたが、一九〇八年(明治四十一年)合衆國へ歸ると云ふ前日に狭心症の爲に急逝した。

一九〇六年(明治三十九年)十二月出版のあやめ會詩集第一「豊旗雲」にはフェノロサ夫人の創作詩三篇が輯録されてゐて、「NIP-PON」と題する詩の第一節に彼女は次の如く歌つて居る。「If this my heart had wings to fly/Str right to the place where it would be/It might become an ecstasy/That, singing, n ounts an Eastern sky./But here it is an anguish, pent/in narrow

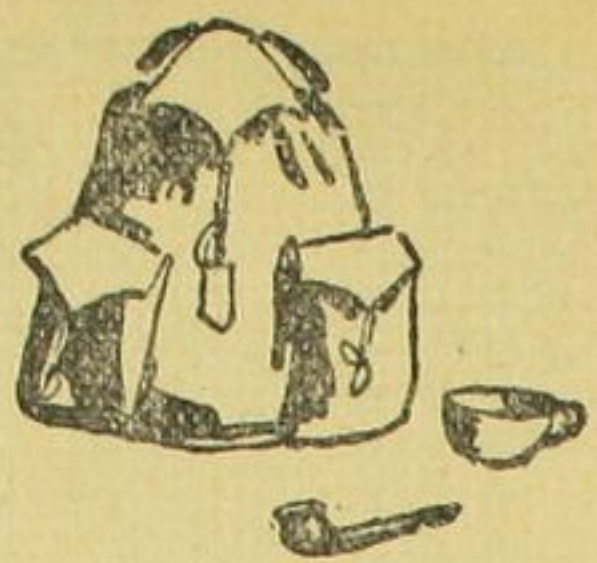
walls of discontent/Reeking struts all day long/With this recurrent, sad refrain./Nippon, — Nippon, — my land of song!/ When shall I see your face again?」此の詩は一九〇六年四月中旬ニューヨークに於いての作であつて、其の當時、果して彼女は二年餘の後に夫の死灰を携へて、再び我が國に來る事を夢想し得たであらうか。然も彼女が此の詩中に歌つて居る日本再遊の憧憬が、此の如き悲しき運命に依つて實現され様とは、家に夢寐にも思ひ及ばなかつた處であらう。

フェノロサの墓は一九二七年(昭和二年)十月、改修されて花崗岩の玉垣が廻らされ面目を一新したが、玉垣左側の石碑に其の發起人、贊助員、贊成者七十餘氏の名が連ねられてゐて、彼の知己、門弟等の美しき親愛、敬慕の程が偲ばれる。右側にも一基の立石があつて、墓前の白川石燈籠、花瓶、香爐を寄贈せる四名の外人の氏名が、彫られて居る。其の中に Laurence Bryon の名を見出す事は少なからず我々の興味を喚起する。フェノロサの墓より上段に位する、月心塔と刻んだ五輪塔はビゲロウの墓碑である。傍に立つ自然石に次の如く彼の略傳が記されて居る。「Here and in his native land, America, he the ashes of William Sturgis Bigelow, a follower of the Buddha, known in religion as Gesshin Koji, a pupil of Sakurai Ajari, a supporter of Homyo-in, a doctor of medicine, a lover and collector of the fine arts of Japan, a recipient of the order of the Rising Sun. His life was distinguished by high thoughts and good deeds, by understanding and by the gift of sympathy. He was everywhere beloved and honoured most by those who knew him best. April 4th, 1850—October 6th, 1926.」

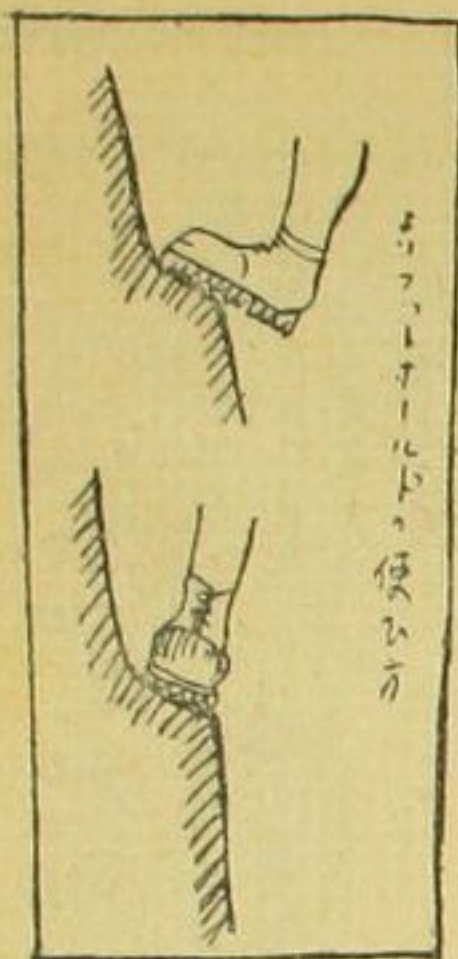
三省を龍志雪の志

岩・雪のテクニク

海野治郎



近頃、世人の云ふ登山・ハイキングは主として心身の鍛錬に重點をおき且つ目的の山も低山が多い様であるからこれは論外におき、雪と岩にて構成せられる高峻山岳にアタックする本格的登山は尠なからず高度の技術と闘志を要求せられるものである。



(第一圖)

これらの聖なる氷雪の山岳へは、誰れもが直ちに向へるものではなく、優れた登山技術を修得し烈々たるファイテングスピリットを有する人々の前にのみその路は開

かれてゐるのである。

登山技術は岩と雪の二大技術に大別される。この内の雪上技術は、岩の技術の上達に準じて進歩するものである。

岩登り技術のヒント

岩には大なり小なり刺目・棚状バンド・凹角・凸角がある。この内充分に人を支へ得るものを足場とし手懸りとして登る。このホールドを連続してあるところいかに急な岩と謂へども登り得る。要は如何にホールドを合理的に有効に使ふかにその成否はかゝる。その登り方のヒントは

- 一、二十五度以下の足場へは靴底をフラットにびたりと置く



(第二圖)

二、手は岩角を掴みバランスをとる(手に力を入れてはいけない)
 三、足で立ち足で登るやう心掛ける
 四、上體を起して且岩から充分離すこと
 五、割目を極度に利用すること
 六、靴先しかかゝらぬホールドも充分に役立つものである。二、三本の鋏をきかして、完全に立つ自信と實力を養へ
 七、鋏をひつけて登るのはよくない。上からホールドを押へつける氣持で登れ(手も又同じ)
 八、手も足も共に絶えず伸し切りにならぬ様に注意せよ。身體が伸び切る時は力が全身から抜けさるものであることを念頭から離すな
 九、同時に両手をホールドから離してはならぬ。たへず片手はしつかりホールドを保て、足また然り、常に四肢の内

三つで身を支へよ
 十、よく目を働かせよ、次のホールドを確認して後動くこと
 十一、登攀前に充分觀察し、適當な溜場と壁とクラック(割目)と棚を組合せてルートの豫定を作つてから登ること
 十二、無理をする
 十三、自己の技術・體力・岩の状態をよく察知し、程度を越すべからず

モラール

サポート

以上は各個人の登り方についてのヒントであるが、岩の登攀は二人乃至三人が適してゐる。それはモラールサポートと

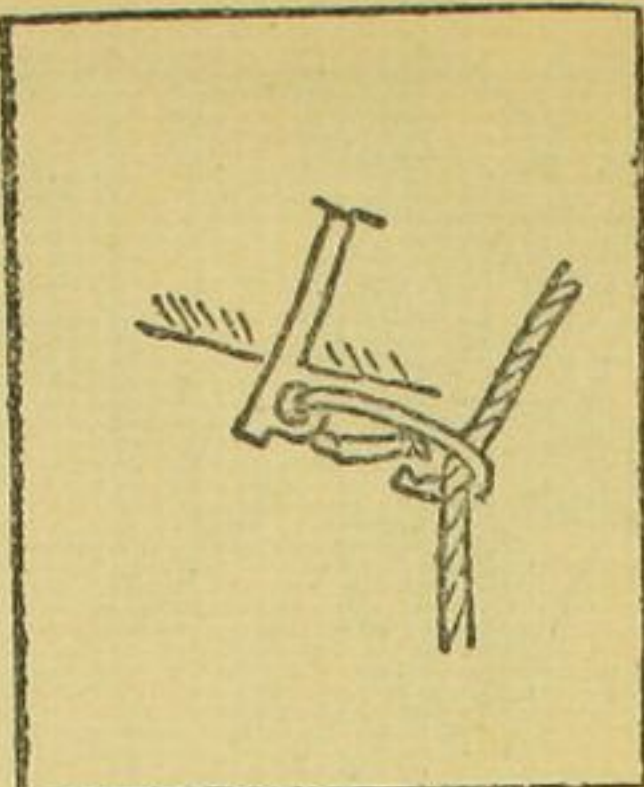


第三圖 正しい姿勢とハーケンカラビナーによる自己確保

第四圖 正しい登り方とホールドの移行を示す



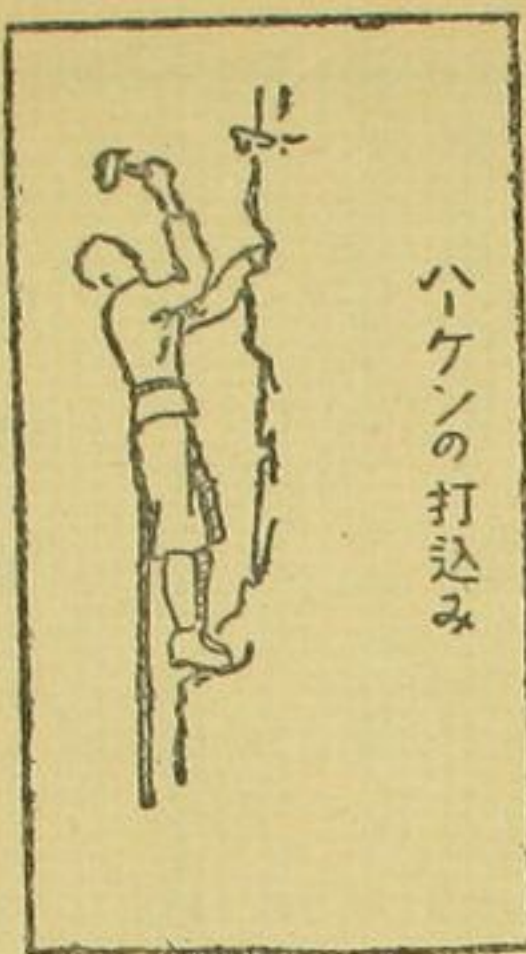
(第七圖)



雪上技術のヒント

一歩手前で打て
 岩においてバランスを修得したものは雪上に於てもよきバランスをもつて上下出来る。

(第八圖)



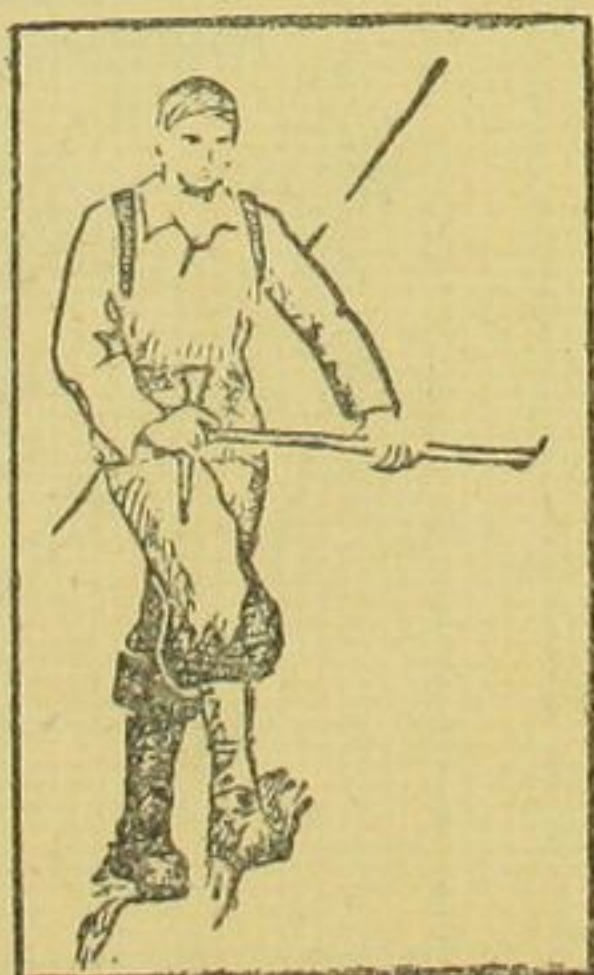
ハーケンの打込み

先ず原則としては一、體を垂直に保つこと。いかに急な斜面に於ても垂直以外になつてはならぬ。初心者の觀點は雪面に近く身體が傾くことがある。これはスリップの危険が増大する
 二、靴先で蹴り乍ら登り、急傾斜、或は凍雪には蹴つて足場を作ること
 三、軟雪は靴先を下げ氣味に眞直ぐ深く蹴込んで直登する
 四、急傾斜の凍雪、深い軟雪では絶対にビッケルは必要で

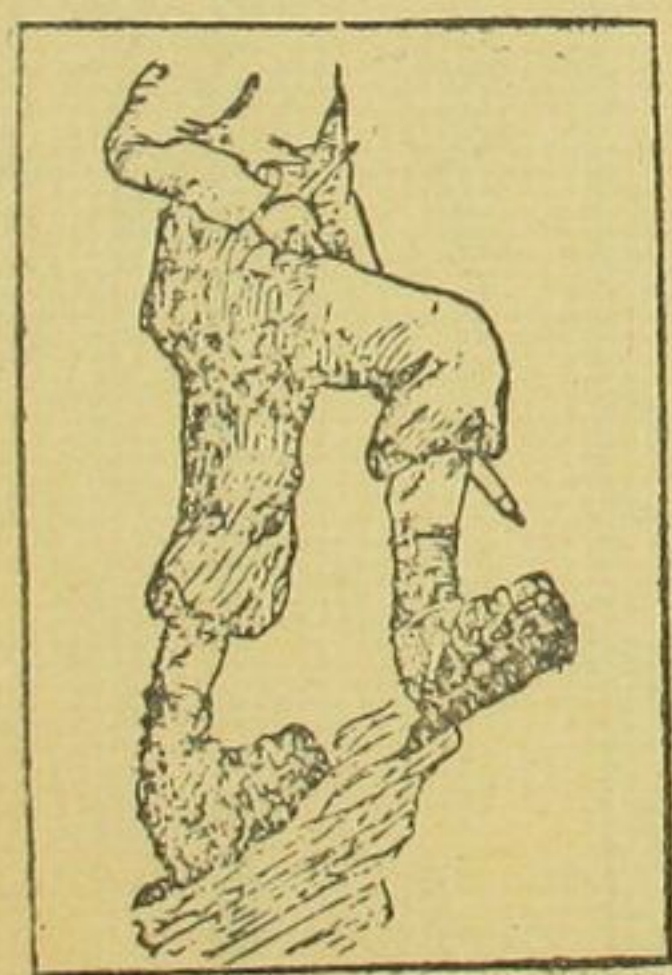
ある。時々ステップを切るべし

五、萬一スリップした場合、直ちにビッケルのピッケルを雪面に押し込みぎみに差して體を止める。凍雪にはビッケルをたゝき込んではない、必らずはねかへされるからである。全身の重みをピッケルにかけて雪に押し込む如くなすべし

(第九圖)



(第十圖)



六、絶へず右の備へを有して雪面を上下せよ
 七、急な雪面、氷面ではアイゼンを使ふべきである
 八、アイゼンはその爪が全部雪面に喰ひ込む様に即ち雪面にフラットに立たねばならぬ

四五

後、續

な、テホ、行、人、接、き、さ、れ、の、は、を、サ、

現在、技、の、術、ハ、



後、

て、以、外、の、米、は、十、九、

- 九、そして體はどこまでも垂直に
- 十、どうしてもフラットにするためには體が倒れそうならば直登はよして電光形登行をとればよい
- 十一、注意深く歩くこと
- 十二、爪の間につく雪の團子をよく落すこと

—— 足場切り ——

- 一、氷の急斜面では足場と同時に手懸りも切るべし
- 二、氷はピッケを以て切り、ブレードにて仕上げをする。氷以外の雪はブレードのみで切る。
- 三、先づ荒く切り、次に内側の角を切り、最後に足場を平にして碎片を掻除ける。



(第十一圖)

- 四、足場の底は水平か稍谷側に傾く様にし、堅い時とか特に確保の時は稍山側に傾く様に
- 五、いづれの場合も足がつかへて困

- らぬ様に山側の端をよく削ること
- 六、斜面に直角に打下ろす事
- 七、腕の力丈によらず傾斜に應じ、腰膝をリズムカルに動かして切る

—— ザイルの使用 ——

アンザイル

ンした場合
岩と同様である。がしつか
りした足場を
作らねばなら
ない。

確保の仕方
は圖の如く
ピッケルを雪
中に差して行
ふ。氷壁の確
保はアイスハ

(圖二十第)



(圖三十第)



してザイル・カラビナー・ハンマー・ハーケンの使用が最も現在の技術として合理的であるからである。

—— ザイルの使用 ——

ザイル使用の精神は、隊員相互に力を合し相互の足らざるを補ふにある。然しこの事はザイルをもつて曳綱と化せしめるものではなく、登攀中の先頭の行動をザイルによつて結合された後續者が絶へず確保し、スリップした瞬間ザイルを引き止めてそれを止めるにあり、且行動者は此僚友の確保を後援として登攀に全力をあげ得るのである。この場合は常に一人づゝ行動し他の者はそれを確保すべきであり、先頭は確實なテンポで登り、適當な溜場を見つけて充分な足場を占めて後、後續者を確保しつゝ登らせるものである。これを反覆繰返しつゝ登攀を行ふ。



(第五圖)

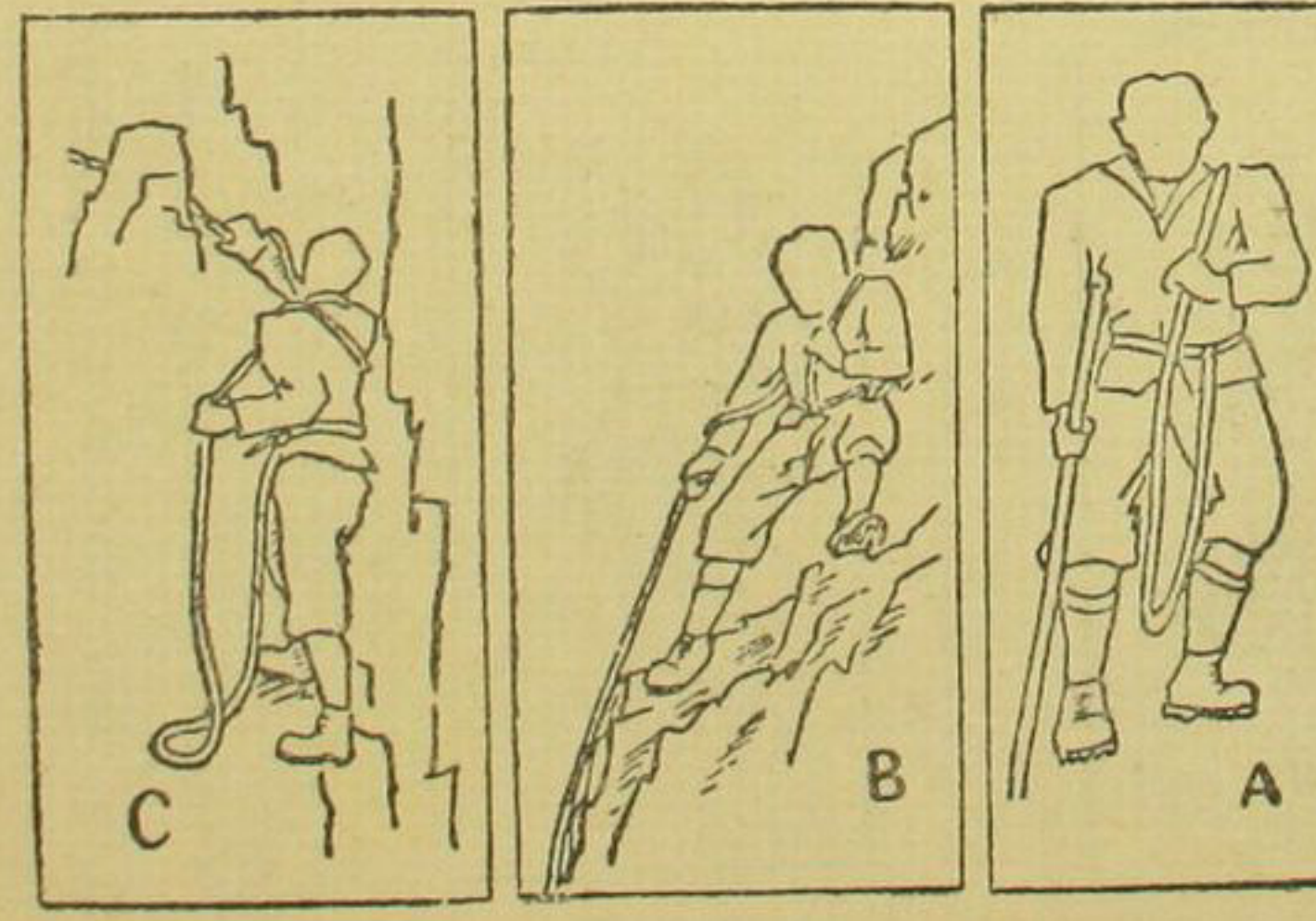
かくザイルの使用はあくまでモラルサポートであらねばならぬ。

—— カラビナー・ハーケンの使用 ——

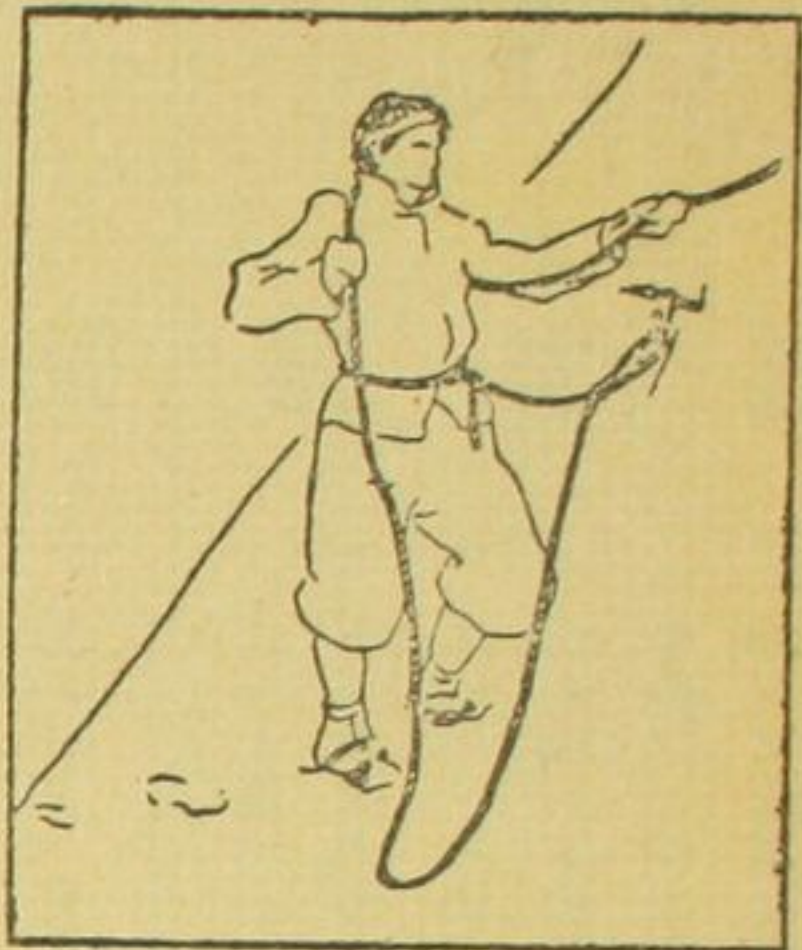
確保に際してその確實性に疑ひある場合は岩の割目にハーケンを打つてカラビナーをかけザイルを通してスリップに備へる。ハーケンの打方は

- 一、必らず根元まで打込むこと
- 二、入らぬ時は抜いて他の割目に打て
- 三、ガッチリ喰ひ込んでゐるかどうかを確かめよ
- 四、上から下へ向けて打込むこと
- 五、進退きはまつてからでは打つ餘裕がなくなるからその

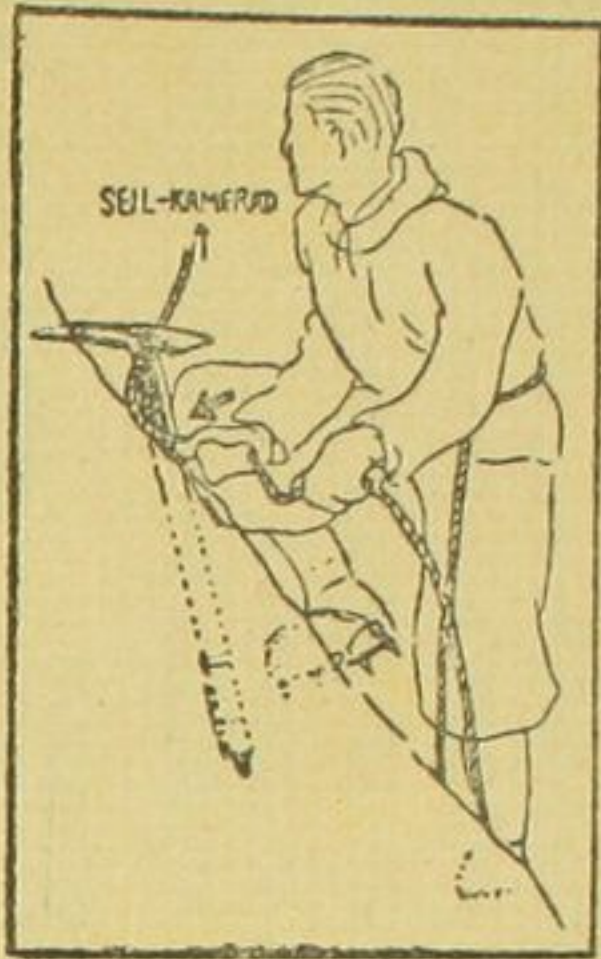
第六圖確保法



(圖四十第)



圖五十第



東京好日山莊主人。養正・C・Cのメンバーの一人で岩登りの大家である。日本登高會編「上野の山」の一部を執筆す。

集古代文字の源流

江戸時代の寺小屋

往昔の寺子屋は寺の和尚さんが近所の子供を集めて、本堂脇の座敷で手習を教へた。それで寺子屋といふたこと。爾來追々に手習を教へる師匠が出来て、一家専門になつたのである。予は幼少の時小石川若荷谷町の天地堂といふ手習師匠へ弟子入をしたのであるから、この天地堂の教授に就て、その思出を書ておく。

此師匠は同地徳雲寺といふ寺の住職であつたが、風痛で足がわるくなつたので、此寺の隠居となり、門前の道を隔て、別宅を作り、そこで手習師匠を始めたのである。

この師匠は弟子の躰が嚴格であつたので、却てその評判がよく弟子が多かつた。諺に小兒六歳になり六月六日から手習を始めると字が上手に書けるとのこと、大概この月日に弟子入をしたやうに覺へてゐる。

其當時は弟子入するにも、束修又は月謝といふ名稱はなく

隨て弟子入するには先輩入門者の振合を聞合せ、束修又は月謝を持参したのであつた。尤も師匠の方には豫め定めがあつたかも知れぬが、まあ有つて無きが如くで、所謂先方任せであつた。然しそこは江戸ツ子の氣質で、出來得る限り氣張つて持参した。

但し其金額はおよそ一朱 六錢二二朱 十二錢、三朱 十八錢七、一分五錢位を持参した。

弟子入の節は机と硯箱(其頃手習机といひて雜貨店にあり)を持込み、また菓子煎餅類の大袋を同門への土産に持つて行くと師匠の方で適當に分配してやる。

五節句並に年暮には、お附け届けといつて、前記の金額を紙に包みのし水引をかけ丁寧に衣類を着替へて持行くと、蕎麥を馳走して呉れた。但し五節句は休日なり。

毎月廿五日は菅公の祭日であるから、天神様のお祭りとして休日である。但しその前日天神講として姓名を記した小さき木札を受け、これに廿五文結附けて納める、翌廿六日には天神様へ備へたお菓子とて分配して呉れた。

稽古場(教室)は凡そ五十疊敷計りの場所で、此内に男座女座と分けてある。

毎日の修業時間は朝五ツ時(午前八時)から晝過ぎの八ツ

時(午後二時)までなり、お師匠さんが稽古場へ出て來ると

お弟子の銘々は、お師匠さん只今〳〵と辭儀をする、お師匠さんはこれに對し會釋してハイ〳〵と受けつゝ定席に着座する、その席の三方に机をめぐらし、名を指して呼ぶ、呼ばれた弟子は硯箱と草紙をもつてお師匠の前で書き習ひ、また手本の読み方を教へて貰ふのである。此弟子を一順するのはその教へ方が懇切であつたためか、約一週間を要するのである。

手本の文字は一般に御家流なり、先づいろは四十八字から手ほどきをして貰ひ、次に一二三から九十百千萬億、その次にいよ〳〵御機嫌能く候、夕方より御出待入候、以上を端手本といつて西之内一枚を折つた手本である。それから折手本となる。男子は名頭源平、國盡五畿内、江戸方角、士族の子は消息往來、町人の子は商賣往來、その以上は庭訓往來等の順序であるが、この庭訓往來まで習上るには、凡そ六七年を要するゆへ、町人の子供は奉公に出る都合もあるので、大概江戸方角位で退學する。女子の方は端手本は男子と同様であるが、折手本になると都路往來または假名文である。手習草紙は五六冊づゝ持参する。

清書は月に六齋即ち一六とかであつた、此清書は朱で直し

かつた運命を逃れ、さる名の筆、寂蓮の詞書と傳へら家の所蔵に落ちつくこととれる古今の名實だから喜ぶなつた。近來稀な美術界の一方若し外人にでも買はれ發見であると同時に國外輸

て返す、それには左記の奥書がしてある。

一段見事に御座候
殊之外見事に御座候
見事に御座候

一段見事に御座候とある清書には、筆一本を御褒美に呉れた、されば一段を貰ふと大に威張つたもので、今日の甲乙丙の等級と同じである。

正月には書初めがある、奉書或は唐紙に揮毫し、これを稽古場に張出す、この手本は別に書て貰ふ、その文句は大概和漢朗詠集などであつた。

正月七日には福引があつて、その景物は男子に風、風糸、うなり等、女子には羽根、羽子板、鞠歌、かるた等である。

これが一年の内で一番楽しい日であつた。土用中は嚴暑であるから、朝習ひといひて夜が明けると出掛けて、四ツ時(午前十時)に終つた。

或る手習師匠では珠算も教へたが、天地堂では手習ばかりである。

それから早出、残り番、水番、茶番等の役があり、これが順番に廻つて来る。

早出番は三十分計り早く参り、一同の机を出して並べる、

但し机の兩足には姓名札が張つてある、その並べ方は向ひ合せに四五側計りなり。

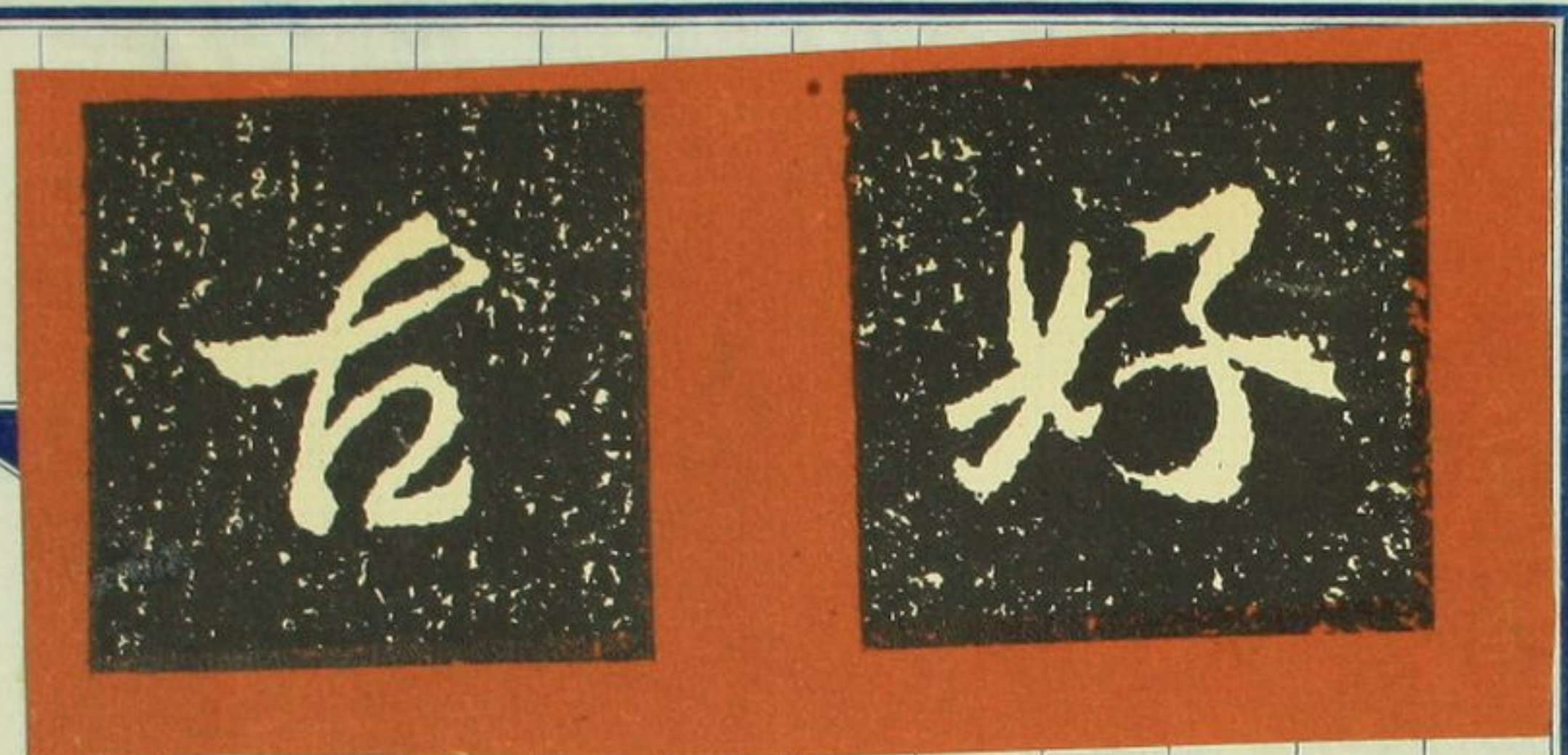
残り番はこの机を仕舞片付け、稽古場を掃除して歸る。

水番は水入れの水をいれてやる役で、小桶を持つて水はいかい／＼と言ひながら廻る。

茶番は辨當の時、茶をついで廻る。

晝飯は近所の者でも家へは歸らず、必ず辨當を持参する、これは食事の仕付けを教へるためである。此辨當に就て面白い話がある。すべて町人の子は辨當は御飯が白米であるから見ても奇麗でまた美味である。武家の子の辨當飯は三四年も蓄積した米で、色の黒い俗にボン／＼チ米といふ、味は更に無く、たゞ生活上殖へるのを専一としてゐたので、恰も豆入種の如き飯であつた、然し武家の子はこの黒いボン／＼チ米を晴がましくしてゐた、それは白い御飯を持つて来ると、其家では戴く御扶持が不足だから、お米を買つてゐるのだと却て卑まれたのである。

大小便の節は、小便は一人で参るが大便には必ず二人で行くことになつてゐる、そしてその一人は便所の入口に立つており、もし用便してゐるものが、便所を汚した時には其本人に掃除させるのである。



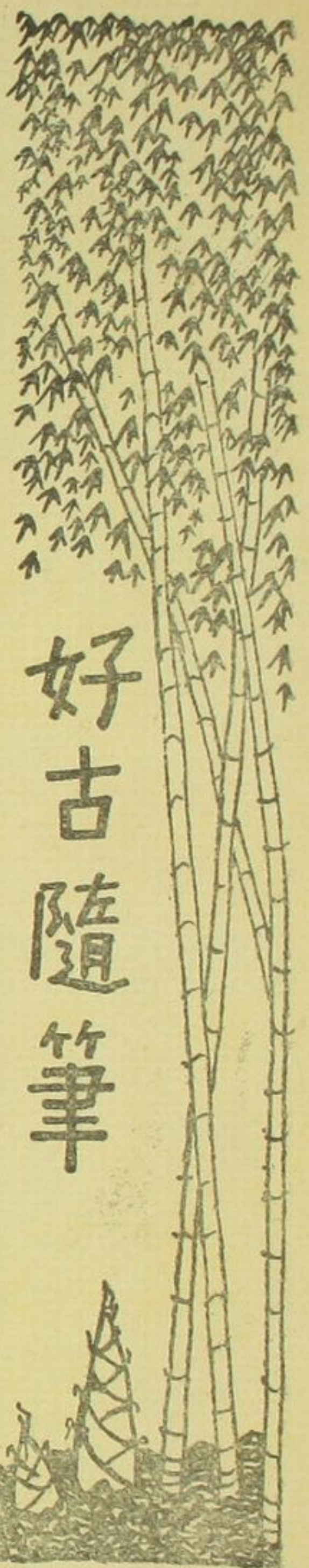
光長筆・寂蓮詞書

「病草紙」の一部

美術店頭で発見される

平安末期の繪巻物中最も貴出を一步前で救ひ得た吉報重なる文獻として珍重されてでもある、この発見者は美術の國寶「病草紙」の未見の術研究所長矢代幸雄氏で先一部分が圖らずも今回或る頃關西旅行中に某美術商の美術商の店頭から発見され、店頭で発見、何しろ我が國海外へ輸出するかも知れない、大和繪の最大の人たる光長かつた運命を逃れ、さる名の筆、寂蓮の詞書と傳へら家の所蔵に落ちつくこととれる古今の名實だから喜ぶなつた、近來稀な美術界の一方若し外人にでも買はれ発見であると同時に國外輸ては一大事と心配し、早速

八方奔走の末この程漸く某家所蔵に歸したのである、現在まで知られてゐる病草紙は名古屋關戸家の一巻、原、益田、村上三家にある斷片だけであつていづれも國寶に指定されてゐるが、今回発見された斷片もこれ等と同様明らかに關戸本の斷片でありその圖柄は現在まで全く知られなかつたもの、病草紙を醫學史的に研究する藤浪剛一、富士川游兩博士も未見の斷片だと驚喜してゐる、詞書にもある通り京都七條邊で金貨をしてゐた女が「身とみ食豊か」だつたので肥満して歩行困難、侍女に助けられて歩いても苦しむ様を通行人があざ笑ふ辛辣な諷刺畫で我が繪巻物中の最優品である



好古隨筆

奇遇

會津 八一

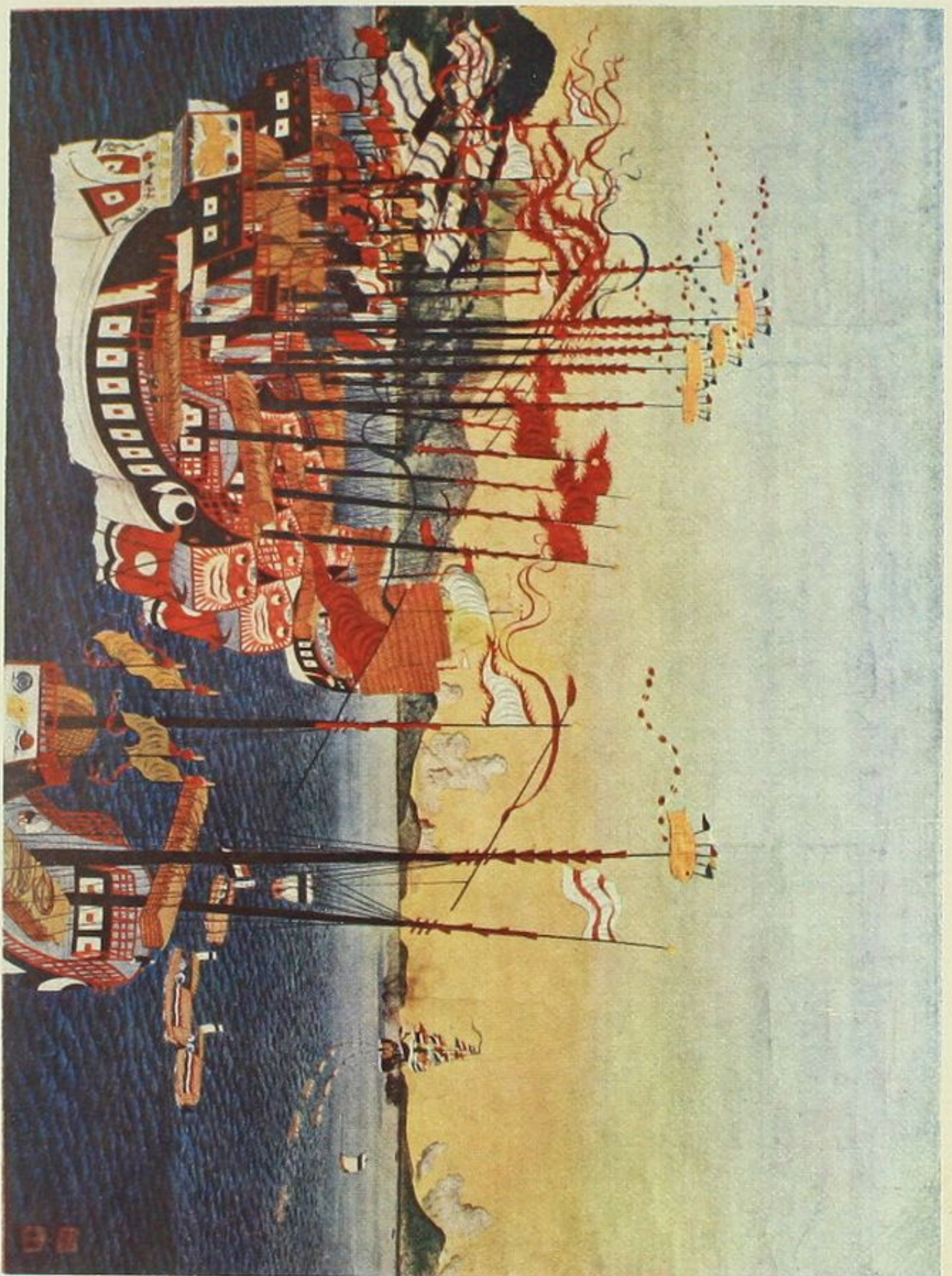
名な武梁祠や孝堂山の畫像石などと比較して、ことに珍重されるのである。

ところが最近、出入の一骨董店から繪のある磚を手に入れたから見せたいといふ便があつたので、早速見に行くと、それは所謂漢式の磚で、圖様は珍しいほど精巧な人馬の繪であつた。しかし惜しいことにその磚は上下二枚で一つの繪を成すべきもの下の半分だけで、馬に頭がない。乗つてゐる人物も足だけで上體はない。馬車も車輪だけで、蓋も馭者も無い。しかし私は四五年も前から別一枚の磚を持つて居た。その方は矢張り二枚あるべきものならば上の半分と見えて、頭ばかりの馬や人物があつた。此の磚のことを遽かに思ひ出して、若しやと

私は一介の老書生で、決して骨董道樂などをするほどの餘裕を持たない。しかし史的研究の必要から常々いくらか標本類の蒐集を心懸けてゐるだけのことである。其れ故格別人に談るほどの手柄斬などがある筈も無いが、最近に一寸面白いと云へば云へぬことも無からうと思はれることがあつた。

それは二枚の磚の話である。磚と云へば一種の煉瓦のやうなもので、正方形のものもあり、長方形のものもある。繪や

文字が表面にあるものもあるし、側面にあるものもある。又何も書いて無いものもある。支那では古來「敷瓦」や「腰瓦」として用ゐたほかに、墓陵の内壁を築くに用ゐたものもある。かうした磚は一つの墓から數百數千も出て來るが、文字のあるものは割合に少い。文字があれば書風を味はふことが出来るし、時としては同時に年代を知ること出来るので、書道史の研究家には最も重要とされて居る。しかし最も少いのは繪のあるもので、有



司馬江漢筆 長崎泊船圖 東京 朝倉文夫氏藏



云ふ心のときめきを感じながら兎も角も直ぐに買ふことにきめた。そして翌朝届けて来るのを待ちかねるやうに合せてみると、正にピッタリと合ふ、人も馬も、車も、輪廓の線までもみんなピッタリ合ふ。のみならず、所々に灰被りらしい釉薬めいたものが附いて居る具合までも同じことだ。私は思はず一人で聲を揚げた。これは千七八百年前に同時に型を脱し、同時に窯を出て、同時に同じ墓壁に用ゐられた、云はゞ兄弟の二枚が、一度發掘されてから長い間別々に流浪した末に、遂に此の私の家の食堂のテーブルの上でめぐり合つたものらしい。奇遇と云ふものであらう。前から持つて居た方は最初臺灣の或る人が愛蔵してゐたものを、後に下谷方面の或る骨董店から私の手に歸したのであつた。こんどのは京橋の或る店から買つたのだが、これは山東省からやつて來たと云はれて居る。元來私には餘り面白い話は無い。たまたまあればこんな事である。

(文學博士早大教授)

身邊探奇

安成 二郎

郷里の土藏の中で子供の頃こんなものを見たとか、自分の死んだ兄の母の夫の祖父——つまり自分の曾祖父に當る人が醫者で、長崎へ遊學したときシーボルトに貰つたネクタイでこれはあるとか、何かさういふ下手物の人物を祖先に持つてゐると、おのづから骨董趣味といふものも養はれるやうであるが、己れを以て祖先とするやうな私には、何一つ祖先傳來のものもなし、生活の巷に奔走して、さういふ高貴にして閑寂なる趣味を楽しむひまもなかつた。

好古書房主人が隨筆を書けと云ひ、珍藏があれば寫眞師を差向けるといふのであるが、身邊を顧みて、今更ら自らの趣味的人物にあらざるを歎じてゐると、嘗て君のところで見えた屏風のことでもいい

と、また促して來た。それでは書かざるを得ない。

尤もその屏風のことは、前に大阪朝日の一日一文といふのに書いたことがあるが、それは高さ三尺五寸の六曲屏風で、それに手紙の封筒の裏面、即ち差出人の署名を貼り交ぜにしたのである。皆な文壇思想界の人ので、島村抱月、夏目漱石、網島梁川、九條武子、木下尚江、内藤鳴雪の故人もあり、幸田露伴、徳田秋聲、菊池寛、高濱虚子等の現存諸氏もある。若山牧水も、芥川龍之介も、吉井勇もあり、すべて三十九枚貼つてある。墨書もあり、ペン書きもあり、上手下手さまざま、封筒もさまざまで、一々自分にとつて何かの思ひ出のある人々であり、見てゐて興趣盡きないものがある。

